

国姓爺が仕掛けたイマリ開発 —イマリはアジアへの輸出商品として誕生した—

池本 正純

目次

<プロローグ>

1. イマリ誕生前夜
 - 1) 有田皿山
 - 2) 朝鮮陶工李参平—日本初の磁器—
 - 3) 中国の磁器技術の導入
2. 「アジア全体が磁器に飢えていた」—イマリの誕生—
 - 1) バンテン王国—アジアの交易の拠点—
 - 2) 中国磁器が手に入らない！
 - 3) イマリ輸出の始まり
 - 4) アジア海上交易の覇者鄭氏一族
 - 5) 国姓爺鄭成功—抗清復明の英雄—
 - 6) イマリ輸出の本格化—海禁令と遷界令—
 - 7) 有田皿山の生産体制の整備と手本の役割
3. イマリの開発を仕掛けたのは誰か
 - 1) 積極的だった唐船、出遅れたオランダ
 - 2) 日本にゆかりのある鄭氏一族
 - 3) 企業家鄭成功

<エピローグ>

<プロローグ>

今回の調査（2019年度社研春季実態調査—北九州・佐賀）に参加した動機は二つある。一つは、スペースワールドにあったあの巨大なロケットはどうなったのかということ、もう一つは、江戸時代、伊万里焼を運んだのはどんな船だったのかということ、この二つを確認したいということであった。

前者については、旧八幡製鐵所で使われていた高炉（別の場所に移されている）の見学をした折に、説明係の女性から聞くことができた。「ロケットは裁断して廃棄しました。せっかく高額のコストをかけて作った実物大のモデルですから、当初は、どこか引き取り手がいないか探しましたが、結局いませんでした。専修大学さんが引き取ってくれば良かったんですけどねー。

（いや、それは無理でしょ！）ロケットの上の方から順に少しずつ裁断していきました。私たちのオフィスからも見えたのですが、毎日徐々になくなっていく様子を眺めるのは寂しい気持ちでした。」

1990年代、新日鐵が鉄以外の分野に仕事の領域を広げていこうと方針を打ち出した時、その象徴的なプロジェクトとして「スペースワールド」が旧八幡製鐵所跡地に開設された。じつは、できてまもない頃、社研で見学もし、私も参加した。これからは宇宙の時代、子どもたちに宇宙の知識や科学に興味を持たせ、宇宙開発の夢を語ろうという趣旨のテーマパークだったように記憶する。スペースシャトル・ディスカバリーの実物大モデルがそびえていた。

カウントダウンの後、ロケット発射の瞬間を演出するイベントが用意されていた。「発射！」の掛け声が勇ましく響いたあと、ロケットの下の方から白い煙が噴出され始める。しかし、その勢いはなんともへぬるい。迫力がない。しかも、おおきな図体のロケットはじつと静止したままだ。微動だにしない。ロケットを打ち上げる瞬間のクライマックスとしての感動がなかった。「子どもを連れて遊びに来るか」と聞かれても、正直「来たい」とは言えなかった。（社研の実態調査を海外にも広げられないか、例えば北九州から目と鼻の先の韓国などに行った方がよほど面白いのではないかと私が発想したのはこの瞬間であった。）今から思えば、やはり、「バブルの塔」の一つであったというしかない。スペースワールドはいま駅名にだけ残っている。向ヶ丘遊園と同じだ。

もう一つの確認したかった疑問、伊万里焼を運んだ船についてである。今回の調査の途中、同行した同僚にこの関心を話したことがある。「北前船ではないかと思う」と話すと、「それは池本の思い過ごしだ。そもそもコースが外れている」とにべもない。しかし、感は当たっていた。有田の佐賀県陶磁器工業組合を訪問した時、江戸時代のイマリの話の中で「伊万里から北前船に積んだ」と聞いた。「どこに行けばその資料はあるか」と尋ねると、佐賀県立九州陶磁文化館か有田町歴史民俗資料館に行けばあるかもしれないとのこと。前者は、次の訪問先でもあった。早速着いてすぐ受付にいた女性係員（責任者と思われる）に、期待を込めて聞いてみると、「伊万里港に来ていたのは北前船だと昔からよく聞いていました」との返事であった。しかし商業・流通の歴史に関する資料はここにはないとのこと。ここはあくまでも陶磁器・美術品としての紹介なのである。残念なことに、今回の社研調査はここが終点であった。

帰途、福岡を目指す人たちと有田駅で別れ、バスの中に残るのは佐賀空港を目指す5人だけ

となった。事務局長が、飛行機の時間を考えると少しだけ時間が取れるが、近くで散歩でもするかと聞くので、すかさず、「短い時間で良いから歴史民俗資料館に寄って欲しい」と願い出た。幸い他の人たちの同意も得られ、場所も泉山陶石場のすぐそばで、バスの向かうルートから逸れていない。こうしてかろうじて寄ることのできた歴史民族資料館であった。果たして、私が聞きたいことを知る人物が待っていた。受付にいたその男性は、待ってましたとばかりに急ぎ足で館内を自ら案内した上で、話してくれた。「そうです。北前船です。和歌山の有田（ありだ）から来た船は根来塗りという漆器を積んできました。福岡の芦屋から来た船は昆布を積んできました。」いずれもそれを売り捌き、焼物を買って伊万里を輸出したという。買積み船である。有田（ありだ）で焼いた陶磁器を有田（ありだ）から来た船が運んだというのが可笑しかった（有田みかんはありだみかんを読むというのは初めて知った）。

興味深かったのは荷造りの話である。磁器は割れ物である。皿や碗、鉢など形も様々で、荷造りが難しい。伊万里焼については、荷造りの専門家で「荷師、荷士（にし）」と呼ばれる人たちがいたそうである。独立したプロである。ワラやむしろ、縄を使って巧みに荷造りをする。最後は俵に入れる。オランダ船ではさらに木箱に入れる。出荷する有田、船に乗せる伊万里津、輸出する長崎にそれぞれ荷師が何人かずつ居たそうである。オランダ船の木箱の中には磁器の梱包材として古い浮世絵が使われていた。今で言えば古新聞だ。それが磁器と一緒にヨーロッパに渡り、やがて印象派の大家となる若き画家たちの目に留まったのだという。

最後に逆に質問された。荷造りしたものはどうやって運んだと思いますか。馬の背か大八車じゃないですかと答えると、「天秤棒で担いで運びました。いいものはずっとそうでした。」とのこと。有田から伊万里まで12キロ。「荷担い人（ににやーにん）」と呼ばれる人たちがいたという。楽しく面白い話であった。今回の調査についてきて良かったとつくづく思った。

幸いにもそこで教えてもらった資料が手に入った。読むうちにまた別の本との出会いがあり、やがて私にとって驚くべき発見が待ち受けていた。私の中のイマリに対する常識的な理解あるいは先入観が覆ったのである。いや、自分の無知に気が付いたというべきかもしれない。「常識的な理解」とは次のことである。

一般的に、地域の特産物の歴史を思い浮かべるとき、それが特産となるべき自然環境の恵みや生産技術が磨かれていく歴史的経緯がある。それが商品として地域から国全体に広く用いられ流通していくうちに世の中の評価が高まり、やがて海外にも輸出されるようになる。これが常識的なストーリーとして私の頭の中にある。したがって、特産商品に関する歴史の叙述も、流通についてはまず国内を述べ、その後が海外輸出であろう。イマリについても常識的にその流れを想定していた。通念に従った先入観と言ってもいい。

事実、江戸時代の伊万里焼の流通を述べた『有田町史 商業編 I』⁽¹⁾、『伊万里市史 陶磁器

編 古伊万里』⁽²⁾における目次は二冊ともその順序にしたがっている。国内流通が先に述べられ、海外輸出（貿易編）が後に述べられる。目次がそうであるからには、その常識的な理解や通念でいいのだろうと思った。しかし、読めば読むほど、イマリについては目次の順序を逆にすべきではないかと思わざるをえなくなった。そして、坂井隆著『伊万里からアジアが見える』⁽³⁾という本に出会ったのである。その疑問は確信に変わった。イマリは国内で流通する前に輸出商品として誕生したのである。

このことは、私の先入観や常識が覆った（発見があった）他のいくつかの点に繋がる。第一は、イマリの輸出先である。江戸時代、長崎出島からオランダ東インド会社の船でヨーロッパに運ばれたと昔から聞いていた。それはそれで事実である。だがオランダよりもはるかに多いイマリがアジアに運ばれていた。アジアの陶磁器の市場とはどんな市場だったのか。

第二は、イマリが海外に輸出されるようになった理由である。私はイマリの品質の高さ、世評の高さだと思っていた。しかし、違った。国際市場で取引されていた磁器は古くから中国産のものであった。ところが、中国の政治動乱の影響で中国の磁器が国際市場で手に入らなくなったのである。イマリは中国製品の代替品として輸出され始めたのである。中国の政治動乱と中国磁器の貿易との関わりは何だったのか。

第三に、イマリは、国内の歴史的流れの中で自然に需要に応じ生産が伸びてきた商品ではなく、国際市場で磁器供給が途絶した緊急な課題を解決するために、輸出商品として積極的に「開発」されたものであった。国際市場にいきなりイマリは出現した。海外の需要に応えるなかで技術は急速に磨かれ品質は高まった。同時に量産体制も整えられていった。問題は誰がそれを「積極的に」仕掛けたかである。

上記の事柄はすべて相互に関連しあっている。私にとって思わぬ発見、驚きの発見となった。

これらのことを含めて「イマリを運ぶ人々」としてまとめてみたいと思って書き始めた。順序は、先に海外輸出、そのあと国内流通の順である。ところが、前半を書いている最中に締め切りを過ぎてしまった。時間がない。前半でまとめるしかない。後半のイマリを運んだ「北前船」の実態については、また別の機会に譲りたい。

1. イマリ誕生前夜

1) 有田皿山

ここでイマリとは、江戸時代に商品として流通していた伊万里焼をさす。焼いていたのは有田（西松浦郡）であるが、出荷するのが伊万里津（伊万里市）であったのでこの名が付いた。本来は有田焼である。ちなみに、中国福建省の漳州窯で焼かれた磁器はヨーロッパでスワトウ・ウエアと呼ばれた。出荷された港が沿海の汕頭（スワトウ）であったからという。⁽⁴⁾ 歴史家は

イマリを肥前焼（肥前磁器）という。⁽⁵⁾

器を焼く窯焼きは皿屋と呼ばれ、その拠点である登り窯は皿山である。個々の山は上に地域の名をつけて区別する。窯焼きが集積した有田は集合的に皿山と呼ばれるようになった。有田皿山は三つに区分される。内山、外山、大外山である。⁽⁶⁾ かつて鍋島藩の御用窯があった大川内山（おおかわちやま、伊万里市）で焼かれたものを特に「伊万里焼」と呼ぶことがあるが、ここでは拘泥しない。有田皿山としてみれば、大川内山は内山でなく外山に属す。藩窯で焼かれた最高級品「鍋島」はここではイマリに含めない。それはあくまでも大名の贈答品であり、商品ではない。したがって輸出もされない。

イマリは地域の特産商品としてみた場合、特殊な生い立ちを持っている。それはまず輸出製品としてスタートしたということである。国内流通が本格化するのには、輸出がピークを過ぎてからである。「アジアが磁器に飢えている」⁽⁷⁾ という当時の歴史的背景の中で、その需要に応えるという緊急な課題を解決するためにイマリは開発された。

イマリは磁器（porcelain）である。日本で最初に磁器が生まれたのが有田である。17世紀になるまで日本では磁器を作ることができなかった。日本で作られたのは陶器（earthenware）だけであった。ただ当時すでに磁器は知られていたし使われてもいた。中国からの輸入製品である。江西省景德鎮窯、福建省漳州窯は有名である。特に景德鎮窯は古い時代から磁器の製造技術が高く、品質は優れていた。漳州窯の陶磁器は景德鎮窯の製品を模倣しながらも、独特の豪快な雰囲気を持つ。日本では呉須手と呼ばれた。⁽⁸⁾ いずれにしても当時の庶民が手にするものではない。

佐賀には焼物技術の伝統が根付く地域があった。唐津である。その名の通り朝鮮の影響があったとされる。「中世までの九州には、目立った窯業地は皆無でした。しかし1580年代後半ごろ、突如として岸岳山麓（佐賀県唐津市）に窯場が成立し、当時国内では高級で珍しい施釉陶器が焼かれました。これはすでに釉薬が一般的な朝鮮半島の技術が導入されたためで、国内の技術とは一線を画すものでした。」⁽⁹⁾

2) 朝鮮陶工李参平—日本初の磁器—

磁器が作られるようになるのには、大きなきっかけがある。豊臣秀吉が朝鮮半島へ派兵した文禄・慶長の役（1592～1598）の際に、多くの朝鮮陶工が連れ帰られた。それによって九州の各地に窯場が成立した。朝鮮には白磁という磁器生産の技術があった。

「戦国時代に入って茶の湯が広まると、さらに焼物に対する需要が高まった。それは中国に次ぐ焼物産地であった韓国の陶磁器への関心にもつながった。・・・戦国末、無謀な秀吉の韓国侵略戦争は、政治的には何一つプラスの要素を残さず、敗退して集結した。しかし、この時多

くの西国大名たちは、韓国の陶工たちを強制連行してきた。それは・・・かれら個人の人生を大きく狂わせてしまった出来事である。だが技術面では、かれらの登場により日本での本格的な陶磁器生産が始まることにつながった。萩焼・薩摩焼などがそれであり、そのためこの戦争は「焼物戦争」と呼ばれたのである。そのなかで、最大のものがイマリの誕生だった。」⁽¹⁰⁾

「肥前でも多くの人々が連れ帰られ、当初は伊万里市周辺を中心に陶器が生産されました。大陸の進んだ技術の製品を国内初の登り窯という大規模な窯で量産したため、肥前は急速に全国有数の産地になりました。そして、需要の拡大により周辺の地域へと窯場が拡大し、1600年代には有田にも窯業が芽吹きました。」⁽¹¹⁾

当初の有田は、伊万里市周辺の中心地から外れた窯業地で、製品の質も低かったという。まだ窯業の専門化は難しく、農業を主体とする人々が多かった地域であった。ところが、そういう中から南原地区の窯場が頭角を現し、その地域を中心に窯業主体の生活圏が形成されてくる。そのリーダー的存在が家永正右衛門と李参平（日本名金ヶ江三兵衛）であった。李参平は朝鮮から連れ帰った陶工の一人である。日本初の磁器はそこから誕生した。1610年前後のことだと推定されている。⁽¹²⁾

「磁器の生産現場は、朝鮮半島の技術そのままでした。陶器と同じ窯を共用し同じ焼成室、同じ窯道具を用い併焼されました。」⁽¹³⁾

磁器の焼成に成功したと言っても十分な陶石が確保できなければ、磁器の生産は軌道に乗らない。「南原地区で磁器が創始されると、有田周辺に急速に窯場が増加しました。同系の技術は藩境を超え、波佐見（大村藩）や三川内（平戸藩）などにも広がっています。・・・しかし、この段階ではまだ生産の主力は陶器で、徐々に磁器の割合が拡大するとはいえ、陶器を完全に切り捨てることはできませんでした。特別な原料を必要とする磁器は、たとえ生産技術があっても原料がなくなれば終わりです。」⁽¹⁴⁾

李参平と家永正右衛門は方々を探し回り、ついに1616年に磁器原料となる陶石が泉山で発見される。⁽¹⁵⁾間もなく最初の磁器専用窯を築いたのが、天狗谷窯と言われる。⁽¹⁶⁾磁器の焼成は当時地元で「南京焼き」と呼ばれた。⁽¹⁷⁾外来の技術だからであろう。

泉山陶石場が発見され、しかも朝鮮陶工の子の世代たちに南京焼きに巧みなものが増えてくると、日本人の中にも見習って南京焼きを試みる窯焼きが急増した。ここで一つの問題が発生する。登り窯が新たに増え続けると、その燃料である薪を手に入れるために「山伐り荒し（やまきりあらし）」つまり山林乱伐が横行する。山横目（やまよこめ、山林監視官）の役目にもあった西目（にしめ）代官山本神右衛門は、これは重大事と思い、江戸にいた藩主鍋島勝茂に報告する。1637年、勝茂が発した命令は「唐人とその子孫を除いて、日本人陶工を払う（放逐する）」

というものであった。826人（男532人、女294人）が追放されたという。ただし、特別に理由のある日本人は残された。実績のある家永正右衛門はその一人である。⁽¹⁸⁾

それに合わせて、有田皿山の大規模な統廃合が断行された。皿山の実情をよく知る神右衛門の裁断で、伊万里の皿屋4カ所、有田の皿屋のうち7カ所を廃止し、13の窯場に統合したと記録されている。旧有田町の東部に皿山を集約したことになる。朝鮮陶工であってもその場所に家を持たない人は追放の対象であった。⁽¹⁹⁾

皿山の整理・統合は、名目上は山林保護であったが、実際には磁器専業地として有田を発展させるための体制整備であった。サステナビリティと競争力の両立である。

「泉山の良質な原料を用いて、上手な人に、上質な磁器を生産させる体制の確立なのです。さらに、付加価値の高い磁器技術の漏洩防止には、有田町の東部の地域は最適な場所でした。今までの窯業の中心であった町の西部と異なり、直接他藩の窯業地である波佐見（大村藩）や三川内（平戸藩）には接しておらず、しかも南北の丘陵に挟まれた谷筋に新たに人工的に町を造ることにより、東西の出入り口を抑えるだけで、保護・管理が可能で、また原料供給地の泉山に近いという利点もありました。」⁽²⁰⁾

このようにドラスティックな日本人陶工の整理や皿山の統廃合が行われた背景には、「すでに磁器生産が藩の財政上有効な素材となることを見抜いていた、神右衛門の画策があったものと推測されます。当時、藩はまだ窯業を産業として認識しておらず、このまま未統制のまま増殖が続けば、本当に山林保護の目的で、窯業が廃止される可能性もあったのです。」⁽²¹⁾

1640年代の有田皿山は、藩に納める運上銀ではまだ産業として公認されるほどではなかったが、1647年山本神右衛門は初代の有田皿屋代官（後に皿山代官）に任命される。「この皿屋代官の創設は藩の産業としての公認を意味します。翌、慶安元年(1648)には運上銀は77貫688目となり、寛永14年（日本人陶工を整理した1637年）からの10年ほどの間に37倍近くにもなり、藩が見逃せない産業へと急成長を遂げたのです。」⁽²²⁾ 山本神右衛門が代官となった1647年は、初めてイマリが海外に輸出された年であった。

3) 中国の磁器技術の導入

イマリが磁器製品として完成されていく上で、中国の技術が果たした役割に注目したい。磁器の焼成、原料の陶石の発見においては李参平などの朝鮮陶工の貢献が大きかったことはすでに述べた。だが、有田で磁器が誕生した後も景德鎮磁器など中国から日本への輸入は続いていた。日本の磁器はまだ製品として敵わなかったはずである。量産する体制も整っていなかったであろう。質、量において圧倒的な強さを誇る中国製磁器に対し、まだ小さな補完物であったに過ぎない。イマリは景德鎮磁器を目指し染付中心に作られていく。⁽²³⁾

染付けには呉須（コバルトが主成分）という顔料が不可欠である。日本では入手できない。中国から取り寄せるしかない。ルートは「長崎の唐商」である。呉須という表現は、福建地方周辺からもたらされた顔料であるため、地名の呼び名から顔料名に転じたという。⁽²⁴⁾ 長崎の呉須の商人の周りには焼物技術について詳しい知識を持つ唐人もいた可能性がある。

1950年代になると、朝鮮陶工も第二世代の時代になる。すでに輸出が始まっているので海外の需要に対応しなければならない。「このころ磁器から李朝風な面が消え、急速に景德鎮風へと変わりました。保守的な生産の現場でも、中国風の窯詰め方法や新しい窯道具、糸切細工などの技法が出現しました。」⁽²⁵⁾ つまり、取り入れる中国の技術とは、単にデザイン上の意匠に留まらず、窯焼きの様々な方法にまでおよぶ事柄なのである。いや、その基本的な焼成技術・生産過程の改善抜きにデザイン上の意匠も真似ることはできないはずである。

磁器技術の急速な改良は陶磁器の生産過程や技術に詳しい者との間で何らかのコミュニケーションの機会がなければ難しいだろう。その意味で、次の説明は実に興味深い。

「当時、磁器は日本国内でもすでに使用されており、そのほとんどが中国製品でした。そのため有田で誕生する磁器も中国風を目指しました。朝鮮半島と中国磁器の大きな違いは、前者は白磁を基本とし、後者は中国で青花と呼ばれる染付製品を基本とする点です。また当時の朝鮮半島には型打ち成形の技術もないため、日本で産出しない呉須の入手ルートを含めてどこかで中国の技術との接点があったはずです。こうした中国の技術との出会いには、おそらく商人の介在があったものと思われます。」⁽²⁶⁾

上記のことがなぜ興味深いかというと、赤絵技術の導入の際にここでの推測がそのまま歴史のエピソードとして実在するからである。

「柿右衛門に赤絵付けをすすめたのは伊万里の東島徳左衛門である。徳左衛門は長崎で中国人から色絵具を買い入れると同時に、絵具の使用法についても一応の知識を習得した上で有田南川原山の柿右衛門を訪れたのである。柿右衛門は苦心のすえ赤絵付けに成功し、その製品を長崎に持って行って、中国人やオランダ人に売りつけたと書いている。」⁽²⁷⁾ 1646年頃のことだとされる。東島徳左衛門は伊万里の陶器商人である。

有田の陶工であった初代柿右衛門（もとの名は酒井田喜左衛門）は赤絵磁器の創始者と言われる。のちにこの赤絵（色絵ともいう）は、ヨーロッパで有名になる「柿右衛門様式」の重要な技法として発展していく。しかし、赤絵の技術はもともと中国にあったものである。「中国では宋代に始まって（宋赤絵）、元、明以降に発達し、五彩とも呼ばれる。」（ブリタニカ国際大百科事典）明代に景德鎮窯で焼かれた万暦赤絵が有名である。白い器表に赤、青、黄、緑などの釉で描いた模様が濃厚な美しさを醸し出す。日本では茶人たちに愛好され、日本の赤絵の発展に大きな影響を与えたという。（ブリタニカ国際大百科事典）

景德鎮の製品を真似るには赤絵技術がどうしても必要であった。有田全体がそれを必要としたはずである。酒井田喜左衛門はその技術を長崎の唐人から学んだのである。彼について事典にこうある。

「元和元年（1615）頃、父とともに有田南川原に移住、古唐津風の陶器を焼く。同3年（1617）頃、陶工高原五郎七に会い、その指導を受けて染付磁器の改良に努める。また、伊万里の陶商東島徳左衛門が長崎居留の中国人周辰官から赤絵の方法を学んだと聞き、出向いて徳左衛門と協力して工夫を重ね、寛永末年（1643）赤絵の焼成に成功したという。」（ブリタニカ国際大百科事典）赤絵の成功を先ほどより少し早くみている。

この説明が重要なのは、一つには、喜左衛門が有田で陶工として修行をしていくプロセスを明記しているからである。最初は陶器から始まり、次に磁器の染付、そして赤絵の順に技術を身につけている。1610年代から1640年代にかけて当時の有田が辿った技術の歴史そのものである。もう一つの重要な点は、赤絵を学んだ相手が「長崎居留の中国人周辰官」と明記している点である。当時はまだ唐人屋敷（唐人が隔離された場所）ができる前のことで長崎には町中に中国人がたくさん住みついており、福建省出身のものも多かったという。福建省漳州は窯業の盛んなところであり、景德鎮磁器の積み出し港もある。以前から中国磁器の貿易に携わる形で長崎には陶磁器の技術に詳しい中国人が住んでいたと思われる。⁽²⁸⁾

「柿右衛門文書によれば、長崎在住唐人の麴屋町「八観（八官）」が最初の色絵製品の販売に大きく関与しており、製品の見立てをした可能性がある。なお麴屋町は景德鎮出身の真円が開基した、最初の唐寺興福寺のすぐ門前にあたる。この周辺に陶磁器を扱う唐人が集住していたかもしれない。」⁽²⁹⁾

喜左衛門が赤絵付けに成功し「長崎で中国人やオランダ人に売った」というのは、そこで売れた数が重要なのではない。専門的に磁器を扱う唐商に製品の出来栄へのチェック（見立て）をしてもらい、その評価を確かめているところに意味がある。⁽³⁰⁾同時に、磁器輸出のネットワークを持つ彼らにマーケティングの可能性を探ったかもしれない。いや、ひょっとしたら中国人の方から技術上の助言・指導を含め品質の改善を急かされるようになっていたかもしれないのである。いずれにしろ長崎在住中国人との関わりがこれっきりで終わったと想定することは非現実的である。

時はまさに風雲急を告げる政治動乱が中国で発生していたころのことである。農民の反乱を率いた李自成が西安を占領した後、1644年に北京を攻略して明を滅ぼしている。鄭芝龍ら明の遺臣により隆武帝（唐王）が明王として擁立されたのが1645年である。抗清復明の動きが始まっていた。

2. 「アジア全体が磁器に飢えていた」—イマリの誕生—

イマリの輸出について重要な点は二つある。一つは、中国の政治動乱がきっかけだったということ、二つ目はアジア向けが多いということである。

1) バンテン王国—アジアの交易の拠点—

イマリの輸出は、オランダ東インド会社（長崎商館）によってオランダ本国に送られたものと私は思っていた。だが違った。もちろんまったくの間違いではない。しかし、歴史上の大きな真実と比べるとごく小さな事実でしかない。実際にイマリが輸出されたのはアジアがはるかに多い。多くは唐船がアジアに運んだ。じつはオランダ船もそうである。後から割り込んできたのである。古くから、広範で多様なアジアの交易を担っていたのは中国人（唐人）のジャンク（唐船）であった。

鎖国以前、朱印船の時代にすでに日本人はこの交易の輪の中にいたのである。ただ、中国は明の時代以来、倭寇の防止策として「海禁政策」（中国人の海外渡航と貿易を禁止制限する政策）を採り続けた。海外諸国には朝貢貿易のみを許していた。日本との貿易禁止は長く続いた。そこで生まれたのが「出会い貿易」で、東南アジアのいくつかの港を中継地として間接的に中国製品の日本への交易が行われたのである。ルソン、安南（ベトナム）、カンボジア、シャム、安平（アンピン台湾）などである。各地に日本人町ができていた。

鎖国後、長崎の出島に出入りする唐船にこの交易は引き継がれた。日本の重要な輸入品は中国の生糸・絹織物であった。それに対する輸出品は、銀、小判などの金、棹銅や銅貨であった。⁽³¹⁾

オランダ東インド会社は、すでに広範な範囲で盛んであったアジアの交易の輪の中に割り込んできたのである。胡椒の入手が目的だった。

「オランダは、単純に香料をヨーロッパに運んだわけではない。毛織物など自らの産品は、ほとんどアジアでは価値がなかったため、ポルトガル人と同様にアジア域内での複雑な多角貿易を行わざるを得なかった。基本的な構造は、インドネシアの香料を手に入れるために、中国の生糸・絹・陶磁器とインドの綿織物の持ち込みである。そして中国とインドのそれぞれの商品を得るために、新大陸の銀を使ったポルトガルとは異なって日本の金銀銅で決済を図ったのである。」⁽³²⁾

オランダ東インド会社は、1619年、本拠地にバタヴィアを定めた。今のジャカルタである。もともとジャワ島西部のこの地域には、港を持つバンテンという王国があり、アジアの交易で古くから栄えたところであった。しかし、このイスラム王国は17世紀初頭、権力争いの渦中に

あった。それに乗じる形で、バンテンから東 90 キロにあるジャヤカルタという第二の港町にオランダ東インド会社は要塞を築き、町を占領した。そしてオランダゆかりのバタヴィアという名前をつけたのである。もとのバンテンの港はオランダによって封鎖された。オランダは武力を用いてバンテンの機能を乗っ取ったのである。その後バタヴィアの方がバンテンより繁栄することになる。

バンテン王国のティルタヤサ大王はその後オランダと対立を続けるが最後には息子に裏切られ、バタヴィアの牢獄に閉じ込められる。これを契機にバンテン王国は実質的にオランダの従属下に置かれるようになる。⁽³³⁾ (第二次世界大戦後、インドネシアがオランダの領地から独立したときに、バタヴィアという都市名はジャカルタというインドネシアゆかりの名前に戻された。)

バンテンはもともとアジアの交易の重要な拠点だった。良質な胡椒が取れ、ナツメグなどの香料の産地にも近い。重要なのは、スンダ海峡の入り口に位置しているということである。「インドと中国を結ぶ要衝マラッカ海峡は、マラッカの占領によりポルトガルが大きな力を持った。スンダ海峡は、もう一つの重要なルートである。ポルトガルの独占を嫌う各国商人たちは、スンダ海峡を航路とするようになった。」⁽³⁴⁾ イスラム商人にとってはとくにそうであっただろう。「1570 年代ころまでにイスラムバンテンは交通の要衝である海峡の支配権とコショウ生産を抑えることができたのである。」⁽³⁵⁾

バンテンは中国製陶磁器の古くからの流通経路でもあった。バンテンの古い遺跡から多様な中国製磁器の破片が大量に発見されていることからそれがわかる。「バンテンは・・・16 世紀末から 18 世紀前半にかけて、インドネシア周辺で最も栄えた港だった。華人とインド系イスラム商人ネットワークの交流点として、世界貿易の中心を占めた感があった。当時の最有力商品であるコショウなどの香辛料の集積地であると同時に、中国産の磁器の取引地でもあった。」⁽³⁶⁾

坂井隆氏は、バンテン遺跡での発掘調査に基づき次のように言う。

「全体を通観して、16 世紀以降 19 世紀までの世界中の陶磁器が、ほとんどすべてここで見られる・・・まさしくバンテンは、世界の陶磁貿易の一大拠点だったのである。」

「この港市がアジアの陶磁貿易の一大中心地であったことを物語っている。そして大部分を占めるのが中国陶磁だが、17 世紀後半に限ってみるとかなり多くの日本のイマリが含まれていた。」⁽³⁷⁾

イマリはベトナム中部クアンナム地方のホイアンにもかなり運ばれていたという。さらにはインドのクジャラート商人を通してペルシャ、アラビア方面へも運ばれた。坂井氏は、バンテンを中心とするアジア一帯の陶磁器交易を動かしている唐人の集団に注目している。

「これまで、イマリの輸出は伝世品が多く残るヨーロッパに対してオランダによって行われたと漠然と考えられていた。実際には少なくとも輸出盛期の17世紀後半に限っては、バンテンが最も古くかつ量が多い。そして、その輸出はバンテンと争っていたオランダ人ではなく、長崎貿易の中心であった唐人（華人）の手によったことは間違いない。オランダ人はバタヴィアから西アジア・ヨーロッパにイマリを運んだのに対し、唐人は東南アジア全体を市場としていた。さらにバンテンは北スマトラのアチェを経由して、西アジアを含めたインド洋貿易を担っていた。」⁽³⁸⁾

2) 中国磁器が手に入らない！

アジアには古くから中国製陶磁器が盛んに輸入されていた。またバンテンがその貿易の一大拠点であったことはすでに述べた。中国製磁器の代表が景德鎮窯で生産されたものであり、またそれを模倣した漳州窯の製品も盛んに取引されていた。

「この最大の産地での生産が、突然停止してしまう。1644年、農民反乱をきっかけとして明王朝は崩れ、満州族の清王朝の軍が中国全土の支配をもくろんだことによる戦乱が、景德鎮まで巻きこんでしまった。そして海上で長く反清闘争を続ける鄭成功一族の経済力を封じ込めるため、清は海外貿易をいっさい禁止した。このため、鄭氏が屈服する1683年まで、景德鎮を中心とする中国磁器の合法的な輸出ができなくなった。価値の高い中国磁器を手に入れられなくなった国際貿易集団は、他で代替品を捜さねばならない。それが輸出イマリである。」⁽³⁹⁾

3) イマリの輸出の始まり

イマリの最初の輸出は唐船によるものだった。行く先はシャム経由でカンボジアである。積荷は銅、銅板、銅製品、漆器の箆笥などと共に粗製の磁器174俵があった。1647年秋、長崎を出帆している。こんなことがなぜ分かるか。オランダ東インド会社のシャムのオランダ商館職員がバタヴィアの上司に宛てた手紙に、それが記されているという。他人の船の積荷まで細かく調べ、記録を取っている。しかもその手紙が保存されている。詮索がましくかつ几帳面だ。オランダ人の性格なのか、それが任務だったのか。⁽⁴⁰⁾

この唐船の動きを見ていたに違いない。1650年に初めてオランダ船がトンキン商館にむけて、種々の粗製磁器145個を送る。イマリである。さらに1651年にオランダ船はトンキンに176個を送る。同じ年、長崎を出港したトンキン華僑の船も「かなりな量の粗製磁器」をトンキンに輸出した。イマリは、初めインドシナに送られた。⁽⁴¹⁾この段階ではイマリはまだ「粗製の磁器」と記されている。1俵には、物にもよるが10～150個の磁器が入るというから唐船の方が量は遥かに多い。オランダは様子見なのか慎重である。

「海外輸出が始まった頃の伊万里焼は、・・・唐・蘭人からみれば粗製品であったが、それでもかまわない、買いたいという情勢になったのは、中国大陸の動乱で本場の磁器が手に入り難くなったからである。大陸の動乱が日本磁器輸出の動機となり、それがまた生産と品質の向上を刺激して輸出の拡大を促す。」⁽⁴²⁾

オランダはそれまでどのようにして中国磁器を手に入れていたのか。海禁政策がとられたままなので直接買い付けることはできない。明に貿易の許可を願い出るが失敗に終わっている。山脇悌二郎氏は続けて次のように述べる。「オランダ東インド会社（以下、単に会社という）は台湾（台湾島の安平アンピン）で中国磁器を買い付けていた。会社の台湾商會は台湾長官ピーテル・ヌイツと明の廈門長官鄭芝龍が 1628 年（寛永 5）に結んだ約定によって、台湾に渡航して来る中国商人の売り込みを待って、生糸・絹織物などとともに仕入れていたものである。」⁽⁴³⁾

つまり、台湾での出会い貿易である。このころ台湾は中国の領土と認識されていなかった。だから出会い貿易ができるのである。もともと台湾は日本と中国の出会い貿易の拠点であった。日本と中国を結ぶ民間貿易が台湾を舞台として行われていたのである。それだけでなく、台湾は中国と東南アジアを結ぶ貿易の重要な拠点でもあった。オランダはその交易の輪の中に割り込んできたのである。中国から直接買い付けることのできない産品を中国の領土でない台湾で手に入れていたのである。磁器の買い付けもその一つである。1630 年代から 40 年代前半にかけては膨大な数の中国磁器を買い付けていたという。しかし、1644 年の注文を最後にパタリとやむ。動乱の影響である。⁽⁴⁴⁾

そもそもオランダはどうやって拠点を台湾に設けたのか。ここで、坂井隆氏「伊万里からアジアが見える」に拠りながら、澎湖諸島と台湾について少し触れておきたい。澎湖諸島は宋代より中国支配下に置かれた台湾海峡の航路の要衝であった。泉州など福建の港から南に向かうとき、澎湖は大きな目印かつ悪天候の避難場所であった。宗元時代よりフィリピンからスラウェシそしてマルク諸島方面へ向かう「東洋針路」の貿易船寄港地として知られている。明代にこの島々が福建省に組み込まれたのも、そのような航路上の要衝だったからである。澎湖から距離的には近い台湾本島は、まったく明王朝の関心の外だった。⁽⁴⁵⁾

「1622 年、マカオのポルトガル攻撃に失敗したオランダ艦隊は、向きを変えて澎湖諸島を占拠する。対中国貿易の拠点とすることが目的だった。」⁽⁴⁶⁾

「しかし、明王朝はこのオランダの侵略に対し、頑強に抵抗する。福建から派遣された大軍が、たちまちオランダの要塞に押し寄せる。すでに王朝最末期でほとんど組織的軍事力が衰えていた明だが、福建の虎の子軍隊を派遣している。やがて明側と協議の末オランダはここは廃棄して、台湾本島のタイオワンにゼーランディア城を築いた。」⁽⁴⁷⁾ オランダ東インド会社は商

館を設置するに際し、まず要塞を築く。タイワンは陸繋島である。その対岸にプロヴィンシア城を築いている。⁽⁴⁸⁾ 澎湖諸島から台湾本島に移動したのが 1624 年である。紛争後、オランダ側の商館長官ヌイツと協議した明側の代表が廈門（アモイ）長官鄭芝龍であった。彼がオランダと激しく戦ったのは澎湖諸島が中国（明）の領土だからと言うだけではない。そこが彼自身の縄張りであったからだ。⁽⁴⁹⁾

4) アジア海上交易の覇者鄭氏一族

オランダのタイワン商会ヌイツ長官と対峙した明の廈門（アモイ）長官こと鄭芝龍は、福建から台湾を拠点に活躍した水軍である。澎湖諸島では明の軍として戦った。ここで水軍とは、海運能力と戦闘能力（軍事力）を併せ持つ商業集団である。古来、貿易はこのような人々によって担われてきた。平時は貿易に従事し、いざとなれば戦う。海を領地とする封建領主、海上の交易から利益をうる武装集団と言ってもいい。じつはオランダ東インド会社もそれと変わらない。こちらの方には「より残酷な」という形容詞がつくが。

すでに述べたように、バンテンを中心としながらアジアの盛んな交易を動かしていたのは唐船（中国船）であった。その唐船の多くが鄭氏一族、あるいはその勢力下にある船であったという。「この時代にバンテンにやってきた華人の多くが福建南部の漳州出身者であることが、この墓誌から一目瞭然である。カスニヤタン華人墓群は、バンテンで見られる最も整然と群集した墓域で、その存在は安定してここに定住していた華人社会を想定させる。」⁽⁵⁰⁾

バンテンの発掘調査（掘り出された陶磁器の破片分析）から解るように「福建・広東地方の陶磁器の東南アジアへの輸出は、18 世紀を頂点としている。そのかなり大きな一画を漳州地域で焼かれた陶磁器が占めている。スワトウ・ウエアとしてヨーロッパ、そして呉須手として日本に輸出されたものは、さらにその一部に過ぎない。」⁽⁵¹⁾

「産地が漳州のため、当然その最初の流通主体が、閩南（びんなん）語を話す漳州・泉州人であることは間違いない。墓誌などのかれらの明確な足跡が長崎・台湾・バンテンなどにある以上、その海外流通の基本的な部分もかれらが中心であったことは、自然に考えられる。17 世紀前半においては、そこに日本の朱印船とオランダ船が加わるが、1630 年代から 80 年代にかけては、閩南人そのものの政治勢力鄭氏が東・東南アジアの海上権を大きく抑えていた。漳州窯系陶磁は、景德鎮陶磁につぐかれらの主力商品の一つになっていたはずである。」⁽⁵²⁾

アジアの交易を動かしていた唐船の主は福建省漳州地域の出身者であった。その漳州は、景德鎮窯の磁器を輸出する港のあるところでもあり、漳州窯のある場所でもあった。つまり、陶磁器の流通に関してはプロである。窯元の事情（技術レベルや生産能力）もよく知っているだろうし、買い手が誰でどんなものを欲しがっているか情報は持っていたはずである。それを国

際的なスケールで抑えていたのである。

「イマリ輸出盛期に日本に来航した唐船は、主な出帆地が中国大陸福建であった 1660 年までと、台湾に中心があるそれ以降とに大きくわかる。それは鄭成功一族の根拠地の推移と一致している。1630 年代より 84 年まで日本に来航した唐船とは、ほとんどが福建南部を本拠とする鄭一族の直接もしくはその影響下にあった。」⁽⁵³⁾

5) 国姓爺鄭成功—抗清復明の英雄—

その鄭氏一族とはどんな人々なのか。この時代、中国の歴史の中でどのような役回りを演じていたのか。どのようにイマリとの関わりが生まれてくるのか

先に触れた鄭芝龍は、日本との交易で何度も平戸や長崎を訪れていたはずである。平戸に住んでいた日本人女性（旧姓田川）との間に 1624 年一人の男の子が生まれている。彼こそが、のちに日本でも馴染み深く有名になる国姓爺鄭成功となる人物である。近松門左衛門の書いた戯曲「国姓爺合戦」の主人公である。この浄瑠璃は大ヒット作となった。この日中の混血児が、中国の歴史を揺るがすような政治動乱を引き起こす張本人なのである。⁽⁵⁴⁾

時は明から清へと移ろうとする最中である。「父芝龍は東アジアの海賊兼貿易商人として出発し、滅亡寸前の明王朝に帰順する形で他のライバルの海賊たちを打倒して、1630 年代後半には明の海上貿易を独占的に支配する勢力を形成した。一官の通称で、芝龍はオランダにも日本にも名を轟かせた。」⁽⁵⁵⁾

「6 歳の時平戸から明に渡った成功は、南京で学び、明の士大夫としての教育を受ける。やがて成功が二十歳になった 1644 年、明は農民反乱で滅亡した。そしてその混乱の中で、満州族の清が中国全土の支配を企てる。当初、芝龍は皇族唐王を擁して反清の構えを見せる。この時、成功は唐王より明王朝の姓を賜り、国姓爺と称せられる。しかし、形成不利と見た芝龍は、すぐに唐王を捨て清に降伏した。だが、成功は父と決別して反清闘争を継続していく。」⁽⁵⁶⁾ 鄭成功は「抗清復明の英雄」として活躍を見せることになる。

「1650 年までに成功は、芝龍の築いた鄭氏一族の海上勢力を掌握し、福建南部アモイを本拠とする。50 年代には、五商と名付けられた直轄の貿易集団により日本・東南アジアとの貿易での経済力を基盤として、強力な軍隊を養う。そして結果的には失敗するが南京攻略遠征までおこなうようになる。永続的な根拠地確保を企図して、1661 年オランダの支配していた台湾を攻撃し、翌 62 年オランダを追放して台湾の攻略を成し遂げた。その直後、成功は急死するが、以後、孫の代の 83 年まで台湾の鄭氏政権は東アジアの海上貿易を支配して清に抵抗し続けた。」⁽⁵⁷⁾

鄭氏一族は、黄檗宗開祖隠元禪師の派遣も含めて、十数回の日本への援軍要請を行った。徳川幕府は、それに積極的に答えなかったが、貿易関係は活発であり銅銭永曆通宝鑄造の受注な

どの経済的支援は行っている。⁽⁵⁸⁾

6) イマリ輸出の本格化—海禁令と遷界令—

鄭氏勢力の執拗な抵抗に手を焼いた清は、鄭氏の経済力のもとになっている海上貿易を封じ込めようとする。

「清朝では鄭成功らの戦力をそぐため 1656 年海禁の上諭を発し、浙江・福建・広東・江南・山東・天津の総督・巡撫・鎮將に命じて、商民の船が私に自ら出海すること、食糧・貨物等をもって成功らと貿易するのを厳禁した。」⁽⁵⁹⁾

「翌 57 年は 47 艘の唐船が長崎に来航した。このうちの 38 艘は鄭成功の根拠地安海からきたもので、他はカンボジア船 11 艘、シヤム船 3 艘、広南船（ベトナムのクアンナム）2 艘、パタニ船（マレー半島東岸）2 艘、トンキン船 1 艘であった」⁽⁶⁰⁾ これらはすべて鄭成功とその支配下にある船で、南京など鞏鞏（清）の支配下にある船は一艘も来なかったという。前年に海禁令が公布された影響である。「その結果、大陸からの磁器輸出は全面的に、すなわち日本にばかりでなく、台湾・マニラ・パタビアなどにもほとんど留まった。そのため唐船は却って日本の磁器をマニラ・パタビアなどに輸出し始める。」⁽⁶¹⁾

「1658 年はまさにその最初の年である。同年 11 月 5 日から同月 8 日までに長崎を出帆した 7 艘の唐船はすべて廈門と安海（廈門の北東 45 キロ）に向かったが、大量の各種粗製磁器を積んで出港した。同月 18 日に中国に向けて出港した 2 艘の積荷は、ほとんどが粗銅と磁器であった。同月 20 日から 28 日までに中国に向けて出港した 6 艘の積荷もほとんどが粗製磁器で、他は狐とアナグマの生皮だった。廈門はマニラ方面に向かう出洋貿易船の基地でもある。廈門船はパタビアにもいく。日本の磁器が、当時鄭成功の支配下にあった廈門に向けて大量に輸出され始めたことは注意される。つまり海禁令公布の結果、パタビア・マニラには中国磁器が入らなくなり、日本磁器との交代が始まったということである。」⁽⁶²⁾

オランダがイマリ輸出に本格的に乗り出すのは 1659 年からである。「5 艘の蘭船は台湾・パタビア・オランダ本国・アラビアのモカ・インドのスラッテ・コロマンデルに向けて 33,910 個を輸出する。」⁽⁶³⁾ パタヴィア当局と鄭氏との間で起きた南洋の胡椒取引の縄張り争いの余波で、すでに台湾海峡の交易が停滞するという事態が発生していた。台湾を通じて中国から磁器を買い付けるのが難しくなっていたのである。おまけに、台湾商館は 1661 年に鄭成功によって攻撃され、翌年商館を明け渡す羽目に陥る。鄭氏の拠点はこの時から台湾に移る。オランダもいよいよ中国磁器が手に入らなくなったのである。⁽⁶⁴⁾ 日本のイマリがオランダによって盛んに輸出されるタイミングである。

やがて 1661 年、清によってさらに厳しい「遷界令」が公布される。江蘇・浙江・福建・広東

の沿岸 30 華里の住民を内地に移し、商船の出海・貿易を禁じたのである。「中国大陸から長崎に来航する唐船は専ら鄭氏船か、またはその勢力圏内からの発航船となり、それらの唐船が日本の磁器を南シナの廈門・広東方面、インドシナ半島のベトナム・シヤム方面、あるいはバタビアに運ぶ。1664 年 2 月 3 日、日本からバタビアに来航した唐船一艘は、種々の磁器 83,890 個を運んでいる。」⁽⁶⁵⁾

かくして唐船とオランダ船両方によってイマリの輸出は本格的になっていく。

「バタビア当局は、バタビアへの中国磁器の輸入が止まったのでフーク船ピートル号をトンキンに遣り、寛文 9 年 (1669) には 177,240 個の陶器の碗を緊急輸入する。この年、二艘の唐船が長崎からバタビアに運んだ伊万里焼は 106,630 個である。ことほどさように食器の供給は逼迫していた。バタビア市場は東南アジア、南洋各地から蟻集する貿易船に磁器を供給していた。おかげさといえ、アジア全体が日本を除いて、磁器に飢えていたのである。」⁽⁶⁶⁾ トンキンからの緊急輸入は、とりあえず陶器で間に合わせるしかなかったということなのだろう。

7) 有田皿山の生産体制の整備と手本の役割

「有田では 1650 年代初頭までに、景德鎮風な古九谷様式の製品の量産に成功し、柔軟に海外の要求に応えるため、次々と新しい製品が生み出されました。これは、まだ磁器の国内需要が貧弱で、産業としての規模の拡大には限界があった有田にとって、大きなチャンスだったので。」⁽⁶⁷⁾

「有田では、1650 年代中ごろから 60 年代初頭にかけて、生産制度の大きな再編が行われました。これは、1659 年に始まる大量輸出に備え、内山をその生産拠点にするため、効率的に量産できるシステムを整えたのです。そのため、内山の上絵付け工程を分業化し、製品の質やスタイルを均一化し、高級量産品生産に特化しました。この時内山の仕様に合致しない陶工が外山へと移転し、外山の性格の形成に大きな影響を与えました。これにより、当時最高級の古九谷様式の製品を生産していた人々の移住によって、下南川原山が一気に最高級品の生産地へと変貌を遂げます。一方、初期伊万里様式の生産者は広瀬山などに加わり、新たに応報山なども設立され、外山の各山の性格の固定化が進みました。」⁽⁶⁸⁾

内山は窯業の均質化が図られ、量産はできても製品の質的な幅は狭く、多様な需要には応えられない。それを補ったのが外山の窯場で、最高級品から下級品生産まで、山により性格が異なった。これにより、有田全体としては、切れ目なく多様な製品を供給できたのである。⁽⁶⁹⁾

イマリの品質の改善については次のような記述がある。

「もっとも日本以外のアジアの国に磁器の生産がなかったわけではない。トンキン王国には磁器の生産があった。1664 年にはトンキンからバタビアに 12 万個を輸入する。しかし前年の

63年、長崎を出港してバタビアに帰着した蘭船ホーヘランデ号は、トンキン王の注文である日本磁器大皿・小皿・碗など1,100個を舶載している。トンキンの磁器は低品質であって、品種も少なかったようである。つまり伊万里焼は1650年前後のころまでは比較的低品質であったが、十年後には品質の高級と品種の多様においてトンキン磁器を引き離していたということである。」⁽⁷⁰⁾

オランダ本国からの注文には、日本人に馴染みのない器の形も含まれていたはずで、それらは木材または陶土で造られた手本が本国から用意されたという。「品質の高級化と品種の多様化は、手本付きの注文生産が行われたことによって進んだ。」⁽⁷¹⁾ 中国製磁器そのものも手本として提供された。

ただし、イマリの技術進歩にたいするオランダ人の果たした役割を過大に評価してはならないだろう。オランダ人は長崎出島の中で注文の方法として見本を見せたに過ぎず、直接有田の生産者と接する機会はなかった。「おそらく中国陶磁である見本を与えるだけでは、同質のもの生産にたいし何ら積極的な技術保証とは言えない。」⁽⁷²⁾ その通りである。手取り足取りとはいかないまでも、絵付けや窯焼きの方法、量産方法に関するアドバイス、出来具合の見立てなど、なんらかのコミュニケーションがあったのではないか。それができるのは唐人の側である。いや、「手取り足取り」があったかもしれないのである。とにかく、中国製磁器、とりわけ景德鎮磁器を真似ること、それに近づけること、それがイマリの使命であった。

3. イマリ輸出を仕掛けたのは誰か

1) 積極的だった唐船、出遅れたオランダ

ここでもう一度、イマリが初めて輸出されたときの様子（山脇悌二郎氏の叙述）を思い起こしてみたい。最初の輸出は唐船が手掛けた。それをじっと見ていたオランダ船が3年後に続く。輸出した磁器の数は唐船の方がはるかに多い。オランダ船はまだわずかである。イマリの輸出という観点からすると、明らかにオランダは出遅れている。イマリの出来具合をまだ見立てしている雰囲気がある。唐船はすでに、イマリを輸出商品として送り出す態勢を整えていた。輸出をするタイミングを見計らっていた趣がある。

つまり、唐船の側は、すでに見立ての段階は終わっているということである。それが可能なのは、イマリが磁器として完成されるプロセスにこれまで関わってきたからである。試作段階で、日本の商人や窯焼との間に何らかのコミュニケーションが（長崎かどこかで）とられていた可能性がある。買い手の要望に応えられるだろうという判断がすでになされていたということである。もちろん、技術や品質の改善への要求はそのあとも続けられたではあろうが。

イマリの出来具合を事前を知ることは、唐船の側が圧倒的に有利である。出島に閉じ込められ、日本人との付き合いのないオランダ人にはできない相談である。ただ、オランダ人は出島の中で感じていたかもしれない。イマリが生まれつつあること、それに関わって唐船の側になにか動きがあることを。長崎の出島で唐船の動きをじっと観察していたからである。磁器が手に入らなくなった状況の中、唐船はどう対応するのか。オランダ人が詮索がましいからというだけでなく、長崎のライバル（唐船）がどのような手を打ってくるのか、オランダ人たちは固唾を飲んで注視していたのだろう。彼らも必死だったはずである。

この唐船はもちろん鄭氏支配下の船である。動乱を引き起こしている張本人が鄭成功なのである。本拠地が福建なのでそこが戦乱に巻き込まれるのは重々覚悟している。景德鎮窯、漳州窯など磁器の産地が危なくなるのも承知の上である。やがて清が自分をターゲットに海禁の策を厳しくしてくるだろうことも予想できる。自らが支配するアジアの交易において中国磁器の流通は欠かせない要素である。磁器をどうにかして手に入れなければならない。それを一番早くしかも深刻に考えていたのは鄭成功自身である。

2) 日本にゆかりのある鄭氏一族

鄭成功は日本の平戸で生まれた。日本は自分の故郷である。母親が平戸出身の日本人であれば唐津をはじめとする日本の焼物の事情も聞いているはずである。長崎は鄭氏一族にとって馴染みの深い港である。父芝龍は長崎貿易に巨大な力を持っていた。海外渡航禁止の例外として妻田川氏の福建への渡航を認めるほど、幕府は芝龍に一目置いていた。⁽⁷³⁾ 長崎で輸入品の第一でオランダ船も持ちこんだ生糸・絹織物の相場の主導権は、ほとんど鄭氏が芝龍の時代から握っていた。⁽⁷⁴⁾ また長崎には古くからの知り合いもいる。日本の商人や長崎に住みつく唐人である。長崎代官末次平蔵はその代表であろう。⁽⁷⁵⁾ 唐人の中には故郷（福建省漳州）を共にするものも多い。

そのような人的つながりの中で成長した鄭成功にとって、有田で磁器が焼かれるようになったことを知らないわけがない。だから、イマリ（有田の磁器）で代替できるかもしれないと情報を集め、動いたのである。

3) 「企業家」鄭成功

戦乱によって中国磁器の生産・流通が途絶した場合、イマリがその解決策になるのではないかと一番早く思いつけるのは、鄭成功のはずである。新たな磁器の供給源をもっとも切実に必要としたのは彼自身である。長崎は自分たちの縄張りである。有田はそのすぐそばにある。平戸で生まれ育っている所以心理的距離も近い。しかも有田で、日本で唯一磁器の生産が行われ

ている。

課題は、景德鎮磁器にできるだけ近いレベルまで技術を引き上げ、生産能力を高めることである。それは、彼の活動拠点福建省の漳州窯が迎ったプロセスでもある。それを急速度で実現する必要がある。「アジアは磁器に飢えていた」からである。その策に沿って実行に移していくのは自然な流れである。有田の磁器が輸出商品イマリとして完成されていくプロセスに、長崎の唐人たちの影がちらついても何ら不思議ではない。鄭成功が自らの人的ネットワークを最大限に駆使して、「輸出磁器イマリ」の開発を仕掛けたと考えて何ら不思議ではない。

これは単なる空想や絵空事ではなく、発掘されたイマリの破片に見られるいくつかの文字からも裏付けられるという。「陶片資料を見るなら、1640年代の有田猿川（さるかわ）窯産の松竹梅文が染付けされた鉢の内側に、「三官」と記されたものが4点、また窯ノ辻窯の染付吹き墨皿には「五官」、さらに1650年代の嬉野町吉田二号窯の呉須赤絵様式絵皿破片には「鄭某」との、華南の唐人名を思わせる製作時の銘がある。文献史料では、有名な酒井田柿右衛門家文書に見られる色絵誕生記事に、初代柿右衛門が1647年以前に「こす権兵衛」とともに唐人「志いくわん」（四官）より、技法を習ったと記されている。それらは、はっきりと唐人技術者の関与を物語っている。」⁽⁷⁶⁾ 猿川窯は輸出イマリの標準品の生産に特化した内山の窯の一つである。

「輸出がもっとも盛んだった17世紀後半の40年間のものが、その前後の時期と異なって、中国のものとの区別がつきにくいのである。輸出盛期のイマリの大変化は、唐人の技術指導によったものであった。そのために中国磁器との差が極めて小さくなったのである。」⁽⁷⁷⁾

この急速な技術進歩というのは客観的事実である。それに関連することであるが、大橋康二氏は興味深い示唆を行なっている。

「1640年台から50年代にかけて肥前磁器窯では著しい技術革新が推進され、中国の技術が導入されたと推測できる。・・・このことも中国の窯業地が明・清の王朝交替に伴う内乱で疲弊したとみられることと無関係ではない。正保3年（1646）には景德鎮窯のある江西省饒州府も清軍によって攻略されているから、おそらく、このころ陶業者が国外に流出した可能性が強い。・・・有田磁器の技術革新は成形技法、赤絵などの装飾技法、窯詰技法、窯詰に用いる道具などに及び、薄手でシャープな製品ができるようになる。オランダ東インド会社からの大量注文を受ける万治2年（1659）は、まさにこうした新しい技術が有田諸窯の中で一般化した時期にあたる。オランダ東インド会社はこの有田磁器の急速な技術の進歩を長崎商館を通じて知っていたのであろう。」⁽⁷⁸⁾ 長崎商館は唐船や唐人の動きを観察することを通じてその技術の到達度について推し量っていたはずである。

景德鎮の陶業者が戦乱で流出した先が日本の有田であったという示唆はうなずける。鄭一族が支配する唐船に乗せられて日本の長崎に向かったであろう。すでに長崎には景德鎮の出身

者や陶磁器関係の唐商が住んでいた。そして何よりも、その技術を喉から手が出るほど必要としている有田がそばにある。鄭氏とその仲間が彼らの国外脱出を手引きしていたとしてもなんら不思議ではない。そして伊万里や有田の関係者に引き合わせたに違いない。そう考えるしかないほどに、イマリの技術的完成度は急速に高まった。あっという間に景德鎮に近づいたのである。

坂井氏は次のように結論を導く。

「輸出イマリの誕生には、技術指導・原料供給・販路確保の組織的管理がどうしても必要だった。それを兼ね備えた鄭氏一族こそが、輸出イマリを生み出したことは明らかである。」⁽⁷⁹⁾

「東南アジアと日本を結ぶ鄭氏が行なっていた多角貿易を回転させるためには、中国産品が必要である。その重要な一つの陶磁器の主産地が清軍に占領されてしまい、基本的に供給されなくなった。そのために、長く取引があり人的につながりのあった日本のイマリを、新たな供給先として開発したのである。今日でいう、開発輸入であった。」⁽⁸⁰⁾

坂井氏の思い切った結論である。イマリの「開発輸入」を仕掛けた企業家として、鄭成功を見ているのである。鄭氏一族の置かれた状況を知れば知るほど、この結論は説得的に響く。

この結論に関わることであるが、大橋康二氏に次のような記述がある。

「日本では肥前鍋島藩が、そうした状況を見越していたかのように生産力を拡大し、1640年代にまたたくうちに国内の磁器市場を席卷した。寛永14年(1637)から慶安元年(1648)の十年間に鍋島藩が、有田皿山の体制を強化していく動きは、中国の王朝交替による中国磁器の輸出激減を長崎を通じていち早く察知してのことであろうか。鍋島藩は福岡の黒田藩とともに長崎防備を幕府から命じられていたので、こうした海外の情報をいち早く入手できる立場にあった。」⁽⁸¹⁾

つまり、鍋島藩の情報入手の速さと先見性、産業政策の確かさを買っているのである。私は、皿山代官であった山本神右衛門の先見性は買うが、1640年代、藩がどこまで磁器の産業としての将来性(輸出品としての重要性)を見据えていたかについては疑問である。当時、海外(特に中国の戦乱)の情勢を日本側がどのように把握していたかについては坂井氏に次の記述がある。

「1646年8月、新たに隆武帝(唐王)を福建で擁立した芝龍がもたらした援兵要請状には、幕府老中は御三家ともども協議を重ねている。結果的には徳川幕府は、要請にたいし沈黙をつづけた。しかし、大陸の動乱にたいしては積極的な情報の収集に努めた。その最大の情報源は、長崎に来航した唐船からもたらされたものである。各唐船の船長にたいし、出帆地などでの政治情勢を長崎奉行は、唐通詞を通じて聞き取った。それらは、逐一幕府に提出された。・・・誤報や伝聞が多かったものの中国大陸と台湾での明清交替にともなう激動を、徳川幕府は唐船を

中心にほとんどリアルタイムに近い状態で情報把握していたのである。」⁽⁸²⁾

唐船は鄭氏の勢力下の船である。その船長からの聞き取りなので、どうしても中身は鄭氏にひいき目となるのはしょうがない。「誤報や伝聞」も多かった。だが、これ以上に早い情報は当時なかったはずである。何が言いたいかという、日本側がいかにか唐船から「最新の」情報入手しようと、鄭氏は戦乱の最前線にいるリーダーであり、戦乱を引き起こしている張本人である。これから何が起り、それがどういう影響をもたらすかは彼が一番よく知っている。誰よりも早く予測している。そして何よりも磁器に関して最大の利害関係者である。アジアにおけるイマリの必要性・重大性を鍋島藩が想像できるとはとても思えない。

国姓爺鄭成功とその勢力下にある唐人たちが仕掛けたイマリ開発というストーリーに、必然性という観点から私は説得力を覚えるのである。

1683年鄭氏が清に降伏すると1684年展海令が公布され、中国の貿易が再開される。中国製磁器も再び輸出され始める。アジア向けにそれがてきめんに現れる。バンテン遺跡の発掘調査がそれを物語る。

「1684年～18世紀初頭には景德鎮のヨーロッパ向け磁器が増える。その点は肥前磁器も共通である。東南アジア向けというのが消える。東南アジア向けの磁器生産は主に福建・広東地方が受け持つことになる。景德鎮と有田はヨーロッパ向け磁器を作り、その一部がバンテンでたくさん出土している。」⁽⁸³⁾

またベトナム向けについてみると、「ホイアン地域では17世紀末以降、中国磁器、とくに福建南部地方の磁器が主として流通することになる。」⁽⁸⁴⁾

「肥前磁器の海外輸出は東南アジア向けが最も早くから行われ、他地域への輸出に比べて量的に最も多かった。また東南アジアへの輸出品は中国船とオランダ船によって長崎から運び出された。貞享元年（1684）の展海令によって中国磁器の輸出が再開されると、地理的に中国に近い東南アジアの磁器市場は、安価な磁器を供給できる中国磁器にまたたくうちに奪回された。当然のこととして中国船による肥前磁器の輸出は激減したであろう。」⁽⁸⁵⁾

オランダ東インド会社もイマリから中国製磁器に乗り換える。しかし、まったくイマリが輸出されなくなるわけではない。「脇荷」と呼ばれる私貿易の形で輸出は続く。公的な会社の荷物としてではなく、オランダ人個人の荷物として運ぶのである。唐船もアジアに依然としてイマリを運び続ける。⁽⁸⁶⁾ たが、当然だがイマリ輸出のピークは過ぎる。イマリは国内に向けて本格的に流通する時代に移るのである。絵付けをはじめとしてイマリの技術は、国内のニーズをみたすべく独自の進展を見せていくことになる。

流通については様々な商人によってルートが開発されていき、やがて全国的にイマリは普及

する。だが、イマリの国内販売を一手に握ろうとする鍋島藩の画策との間に相克が生まれてくる。藩の収入を確保するために、イマリの国内販売の独占と統制を試みるようになるからである。江戸幕藩体制において、地域の特産品がたどる宿命的ともいべき局面と言ってもいい。商人たちの活躍と藩の統制の影響については、稿をあらためたい。

<エピソード>

近松門左衛門の戯曲『国姓爺合戦』は有名である。浄瑠璃の大ヒット作である。日本人の母をもつ混血で日本に縁の深い人物が、若くして唐王から姓（朱）を賜るほどに期待される。主君の期待に応えるべく、明を復興させるために韃靼人（清）と勇ましく闘い続けるその姿は、日本人の情を湧き立たせる物語となった。その主人公である国姓爺鄭成功がイマリ産みの親であったとは、驚きであった。

しかし、そう考えることで、『有田町史』、『伊万里市史』への私の疑問は解けたのである。国内流通を先に述べ、輸出を後に述べるというのは順序を逆にすべきなのである。疑問は確信に変わった。この抗清復明の英雄が引き起こした動乱の影響で中国製磁器の貿易が途絶し、そのピンチヒッターとしてイマリの出番がきたというのは、時代的タイミングとしてきわめてわかりやすい成り行きである。

問題は、イマリが磁器としてまだ技術的に初期段階にあり、景德鎮窯の製品になかなか敵わない状況の中で、急速度にキャッチアップを遂げたことにある。「最盛期の輸出イマリの図柄は明末のものほとんど同じで、現在の専門家でも区別しにくいものが多い。」⁽⁸⁷⁾ そのレベルまで短期間で到達したのである。

このように急速な中国磁器技術の導入は、決して自然に起きることではない。その背後に、何らかの意図的な関与があったのではないか。長崎在住の唐人たちを通じて中国の磁器技術の導入に向けた働きかけがあったのではないか。そして、その関与の一番奥に鄭氏の意図が潜んでいたのではないか。状況をよくよく考えれば、説得力を持つ仮説である。しかも、それを裏付けるような陶片が見つかったというのが坂井隆氏の説の重要なポイントである。文献資料から伺える人物像と陶片資料から読み取れる人物像とが重なったのである。

イマリが辿った歴史的展開をアジア交易圏という広い視野の中で捉えることの重要性を今回学ばせてもらったように思う。また、中国・アジアの歴史と日本の歴史も常に連動しながら展開していることを改めて認識させられた次第である。歴史家の文献資料解読と陶片発掘に基づく考古学的分析といういずれも地道な研究であるが、歴史上の新しい認識が、相互のシナジーとして生まれてくる事例を今回垣間見た気がするのである。

注

- (1) 有田町史編纂委員会 [1]
- (2) 伊万里市史編さん委員会 [3]
- (3) 坂井隆 [2]
- (4) 坂井隆 [2] p.80
- (5) 伊万里市史編さん委員会 [3]
- (6) 有田歴史民俗資料館 [4] p.25
- (7) 山脇悌二郎 [1] p.318
- (8) 坂井隆 [2] p.80
- (9) 有田歴史民俗資料館 [4] p.18
- (10) 坂井隆 [2] p.95
- (11) 有田歴史民俗資料館 [4] p.18
- (12) 有田歴史民俗資料館 [4] p.19
- (13) 有田歴史民俗資料館 [4] p.19
- (14) 有田歴史民俗資料館 [4] p.19
- (15) 前山博 [3] p.11、[5] p.55
- (16) 天狗谷開窯を 1630 年代と推定する説もある。有田歴史民俗資料館 [4] p.19
- (17) 前山博 [3] p.13
- (18) 前山博 [3] pp.15-18
- (19) 前山博 [3] pp.15-18
- (20) 有田歴史民俗資料館 [4] pp.21-22
- (21) 有田歴史民俗資料館 [4] p.21
- (22) 有田歴史民俗資料館 [4] p.23
- (23) 大橋康二 [3] pp.601-603
- (24) 坂井隆 [2] p.100
- (25) 有田歴史民俗資料館 [4] p.26
- (26) 有田歴史民俗資料館 [4] p.19
- (27) 宮田幸太郎 [1] p.118
- (28) 坂井隆 [2] pp.99-101
- (29) 坂井隆 [2] p.101
- (30) 坂井隆 [2] p.46、pp.100-102
- (31) 坂井隆 [2] p.55
- (32) 坂井隆 [2] p.127
- (33) 坂井隆 [2] pp.135-156
- (34) 坂井隆 [2] p.145
- (35) 坂井隆 [2] p.147
- (36) 坂井隆 [2] p.114
- (37) 坂井隆 [2] p.78
- (38) 坂井隆 [2] p.82
- (39) 坂井隆 [2] p.99
- (40) 山脇悌二郎 [1] p.265
- (41) 山脇悌二郎 [1] pp.265-266
- (42) 山脇悌二郎 [1] p.266
- (43) 山脇悌二郎 [1] p.266
- (44) 山脇悌二郎 [1] p.267
- (45) 坂井隆 [2] pp.219-223

- (46) 坂井隆 [2] p.219
- (47) 坂井隆 [2] p.223
- (48) オランダ人が拠点にしたタイオワン（台南の外港安平アンピンにある岬）の名が、のちに台湾全土を示す用語になったという。
- (49) オランダが台湾本島安平に拠点を移しても問題は発生する。もともと安平は日本と中国との出会い貿易（朱印船貿易）の拠点だった。オランダは後から来たにもかかわらず、台湾長官ヌイツは日本人商人に対し課税しようとした。それに反発した日本人商人がヌイツを人質に取るという事件が発生した。結局、ヌイツは平戸に監禁され、1636年に解放される。浜田弥兵衛事件と呼ばれる。弥兵衛は長崎代官末次平蔵の仲間である。坂井隆 [2] p.223を参照されたい。
- (50) 坂井隆 [2] p.175
- (51) 坂井隆 [2] p.81
- (52) 坂井隆 [2] p.81
- (53) 坂井隆 [2] p.101
- (54) 坂井隆 [2] p.224
- (55) 坂井隆 [2] p.224
- (56) 坂井隆 [2] p.224
- (57) 坂井隆 [2] p.225
- (58) 坂井隆 [2] p.225
- (59) 山脇梯二郎 [1] p.275
- (60) 山脇梯二郎 [1] p.275
- (61) 山脇梯二郎 [1] pp.275-276
- (62) 山脇梯二郎 [1] p.276
- (63) 山脇梯二郎 [1] p.278
- (64) 山脇梯二郎 [1] pp.277-278
- (65) 山脇梯二郎 [1] p.277
- (66) 山脇梯二郎 [1] p.318
- (67) 有田歴史民俗資料館 [4] p.26
- (68) 有田歴史民俗資料館 [4] pp.24-25
- (69) 有田歴史民俗資料館 [4] p.25
- (70) 山脇梯二郎 [1] p.279
- (71) 山脇梯二郎 [1] p.279
- (72) 坂井隆 [2] p.103
- (73) 坂井隆 [2] p.232
- (74) 坂井隆 [2] p.225
- (75) 坂井隆 [2] pp.30-31
- (76) 坂井隆 [2] pp.100-102
- (77) 坂井隆 [2] p.98
- (78) 大橋康二 [3] p.606
- (79) 坂井隆 [2] p.99
- (80) 坂井隆 [2] p.102
- (81) 大橋康二 [3] p.603
- (82) 坂井隆 [2] p.232
- (83) 大橋康二 [3] p.621
- (84) 大橋康二 [3] p.642
- (85) 大橋康二 [3] p.613
- (86) 山脇梯二郎 [1] pp.359-363、pp.403-407
- (87) 坂井隆 [2] p.98

引用文献

- [1] 有田町史編纂委員会『有田町史 商業編 I』有田町 1988 年
- [2] 坂井隆『伊万里からアジアが見える』講談社 1998 年
- [3] 伊万里市史編さん委員会『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』伊万里市 2002 年
- [4] 有田歴史民俗資料館・有田焼参考館『展示ガイドブック』有田歴史民俗資料館 2013 年
- [5] 「皿山なぜなぜ」有田町教育委員会 2010 年